

日頃から助け合い・支え合いができる子どもたちを育てる

上厚真小学校長

井内宏磨さん

——地震発生時は宿泊学習に同行されていたそうですね？

5年生と私を含め3名の教師で、日高町の国立日高青少年自然の家に滞在していました。ドーンと衝撃を感じて目覚め、スマートフォンで調べると、安平町が激しい揺れに見舞われたとわかりました。「厚真も大変なことになっているだろう」と教頭に連絡すると、すでに学校の解錠をして校内巡視の最中でした。「大変なことになっています」と。



井内 宏磨さん

ません。それでも当日の正午頃には厚真町に戻ることができました。

——厚真町に戻られてからはどのように動きましたか？

まずは、電話やメールを使って児童の安否確認を行いました。休校の実施やその時期、今後の対応について決定する必要があるものの、町の教育委員会と連絡がつきにくく、混乱はありました。翌日、町内4校の校長が集まり、安否確認の状況や、今後の対応について話し合いました。

——地震後の学校運営はどのように行いましたか？

参考にできるものがない中で、インターネットが有用でした。阪神・淡路大震災後

の取り組みなど情報を収集し、それを基に、先生方には児童のケアに入ってもらうことができたからです。

幸運だったのは、兵庫県教育委員会の震災・学校支援チームが、すぐ当校に来てくれたことです。児童の見守りや心のケア、地震被害に遭った場所の片付けなど、とにかく人手が必要な状態でしたから、彼らの豊富な知識と経験には、本当に助けられました。教員に向けて講習会を行っていただけのも、大きかったです。

——多くの支援が学校に集まり、助けられたと聞きました。

週明けの9月10日頃に人づてにボランティアの支援をお願いしたところ、方々から多くの人が駆けつけてくれました。お子

さんのいる先生は余震の不安の中、子どもだけを家庭に置いて勤務することはできません。また、避難してきた方々も、家を片付けるのに幼児を連れて帰っては、作業がなかなか進まず大変です。子どもの相手をしてくれたボランティアの皆さんに助けられました。地震の3日後くらいには、NPOが炊き出しに来てくれました。温かいおでんやステーキ丼を配給してくださり、そして気さくに声をかけてもらえたことが心の支えや活力になりました。

——震災後、児童のケアはどのように行われたのですか？

地震に対する恐怖や避難所生活でのストレスが心配されました。地震発生から5日後の9月11日に、保護者同伴でレクリエーションを開催しました。子どもたちは友だちとも会えませんし、避難所で大声を出して遊ぶこともできません。学校という場所で仲間と遊び、交流することでストレスを軽減し、心のケアになればという目的がありました。児童だけでなく、保護者同士も顔を合わせることで安心できる場になったようです。

登校再開後も、継続的に心のケアに努めました。「よく眠れているか」「急に悲しい気持ちになることはないか」などをアンケートで尋ね、その結果や児童の様子から、心配な子どもには積極的に声をかけをしてもらいました。

——震災後の校内の環境整備はどのように行いましたか？

校内の復旧の時に、大きな余震が来ても問題ないように配慮しました。今回の地震で、玄関のトロフィケースが倒れて避難経路をふさいでいました。強い思い入れはありますが、命には代えられません。安全を最優先に、撤去や備品の配置を見直しました。

10月5日にも震度5弱の地震が発生しましたが、倒れたり落下したりする物はありませんでした。そんなこともあって、子どもたちは落ち着いて避難行動をしていました。逆に「学校は安全な場所だ」という安心につながったのかもしれない。子どもの中の不安が薄くなっていくのを感じました。



被災時の上厚真小学校前

——9月18日の授業再開に向けて、どのような取り組みをされましたか？

9月10日に、先生たちに家庭訪問を指示し、児童や家庭の状況を確認してもらいました。情報はホワイトボードで共有し、何が学校にできるかをみんなで考えました。

「9月18日から授業再開」という方針が9月11日に町教育委員会から伝えられ、すぐに準備を始めました。私たちが預かっているのは命——このことを職員と確認し、特に余震発生時の対応、校舎の安全確認、心のケアの3点に力を注ぎました。学校再開当日、全校集会で子どもたちの顔を見た時、目頭が熱くなりました。それは、どの職員も同じだったのではないかと思っています。

——体育館を避難所として使用している中の授業再開でした。困難なことはありましたか？

避難所を開設していた2カ月間は体育や音楽の授業の工夫は必要でしたが、特に問題はありませんでした。その経験がコロナ禍の今に生きていると感じるぐらいです。避難所で暮らしている児童もいました。



自衛隊にお礼状を渡す児童たち(厚南会館避難所前)〔上厚真小学校提供〕

ました。1、2年生では、防災カルタを行って基本的な避難行動を理解し、「自分の命は自分で守る」という自助の意識を育てていきます。3年生は、身近な安全を見直す地域の安全マップを作りました。安全への取り組みには公助があることを理解します。高学年では、崩壊した山林に植樹をしたり、避難所の運営などについて考えたりして、共助が大切なことを学んでいきます。

避難所の体育館はドアで仕切られ、玄関も別にあるので学校生活との仕切りは明確でしたが、それでもプライバシーには気を遣いました。当然、ご家庭のことも気になります。私たちがどこまで踏み込んでいいのか……。

でも、子どもの笑顔や元気は必ず保護者や地域を勇気づけると思っていました。「子どもに笑顔を、上小から灯りを」をキャッチフレーズに、先生方は親身に対応してくれたと思います。

——保護者に対してはどのように対応しましたか？

発災から数日経って、子どもにとっては周りの大人がとて大切な存在であるというところに気がつきました。地震で子どもが感じるのは恐怖です。でも、大人は「仕事ができないんじゃないか」「もうこの家に住めないんじゃないか」など、現実が見えるだけに不安が募ります。大人の方がつらいんじゃないのかな……と。しかし、大人が歩みを止めたら、子どもは前に進めません。学校だよりで「一緒にがんばりましょう」というメッセージを出し、避難所を回

詰め込まれた知識だけでは対応できないことがあることを、この震災は証明してくれました。自分でできることを考え、周囲と助け合って物事を前に進めていく力を育てることが、一番の「防災教育」です。

——今回の震災を経験して、教育に大切なことは何だと思えますか？

震災後、本校は二つのことを大切にしています。一つ目は「主体性、協働性、実践力」です。先ほどの自分で考え、助け合って行動する力のことです。二つ目は「あいさつ、返事、整理整頓」です。今回の震災で、地域のつながりの大切さを改めて認識しました。災害時、最後に力となるのは人と人の支え合い。ふだんから、自然と支え合うコミュニティになっているかが重要だと思いました。

あいさつや返事など基本的なコミュニケーションができないと、災害時やいざという時に人と協力し、助け合うことができません。整理整頓ができないと、発災時に身の危険が生じます。震災を経験し、当たり前のことが非常に重要だと感じています。また、災害時だけでなく誰かが困ってい



上厚真小学校避難所

る先生たちには高齢者の方にも積極的に声をかけていただくようお願いしました。

——震災後、子どもたちに防災について考える時間をつくられたと聞いています。

今年(令和2年)は9月4日を「上小防災の日」として、全学年で防災学習を行い

る時、「あの人に相談すれば、話を聞いてくれて、一緒に先に進んでくれる」と周囲から思われるような人に児童たちが育ってほしいと思います。

主体的に地域の復興、発展に取り組む人材を育てること。学校がしなければならぬ役割を保護者や地域の皆さんの力をお借りして果たしていきたいと思っています。



各支援団体による物資の配給や炊き出しが行われた上厚真小学校前〔北海道提供〕